

—乳児、1, 2歳児の発達に応じた保育の内容と適切なかかわり—

元立教女学院短期大学教授 今井和子

はじめに

子どもの発達の見方を捉えなおす

能力発達（できたか、できないかの結果重視の捉え方）ではなく 発達過程（関係発達）に注目する
なぜなら 子どもは育てられて育つ存在だから。育てられる者から育てる者へ連鎖していく

1) 乳児保育 <人と響き合う能力をもっている乳児>

A 一体となって通じ合い、さまざまな共有関係を分かち合う ⇒愛着の形成

①指針の解説書 111頁より「身近な人と気持ちが通じ合う」

「乳児において、子どもは身近にいる特定の保育士などによる愛情豊かで受容的・応答的なかわりを通して、相手との間に愛着関係を形成し、これを拠り所として、人に対する基本的信頼感を培っていく。また自分がかげがえのない存在であり、周囲の大人から愛され、受け入れられ、認められていることを実感し自己肯定感を育てていく。」

②愛着とは？ 別紙参照

乳児期は、愛着が成立する最も自然でしかも容易な時期。ところがこんには親の養育力が弱い
ため質の高い愛着がなかなか形成できない。

③愛着関係・コミュニケーション力の原初的な成立と発達過程

a 泣く なぜ人間の赤ちゃんは泣くのか？

泣きやませるだけでなく抱いてなだめることが上手になるように
目を合わせ、マザリースや心安らぐあやし言葉を

b 笑う 生後2か月ほどで母親の微笑みに微笑みで応える（社会的微笑）

「人間は大切な相手と一緒に喜びあうことで、初めてコミュニケーションの感情を発達させる
ことを知る。この喜びを分かち合う経験がやがて相手と悲しみを分かち合うことができる・
思いやりの気持ちを育てることになる」ワロン（佐々木正美先生の著書より）

「身振りを意思表示の手段にしていたり、特定の音声を特定の意味を表すために用い、それを特定
人に意図したとおりに理解してもらい（協約性）、その人との間にコミュニケーションが成立する
喜びを味わった子どもは、それに力を得て次々新しい語彙を加え、その子語に磨きをかけていく。
大人から一方的に言葉をかけるより、その子の言葉にならない言葉を聴く（受けとめる）

c 喃語で語り合う

d 共同注視～指さしへ 三項関係(十か月革命)の成立

大人が忙しいと“何見てるの、早くいらっしやい”と子どもを引っ張ることが多くなる

自分の感動を共にしてくれる大人の存在がいかに大切か⇒指さし(言葉の前兆)

子どもと一緒に同じ物を見ながらゆっくり歩く姿が少なくなっている

*怖がっている時、泣きたい時、嬉しい時、全部自分の感情が大人に伝わって共有される。そんな時、
子どもは自分が認められているという安心感をもつ。ところが人と通じあえたという感覚を持ってない
ことがあたりまえだと感じてしまっている子が増えているのではないか。

(例 落ち着きなく動き回るタイプの子は結果として人と通じ合える経験が乏しくなる)

e 物の永続性の理解

f 人見知り

g 象徴機能の発達と一語文

イマジネーションが育まれることで、見立て、つもりが生まれ、過去の感動体験を代用物を使
って表現できるようになる。過去を現実に取り写して表現できるようになる。

一語文というのは、物の名前を表すだけでなく、子どもは文章語として使っているつもり

(例 バナナ⇒バナナが食べたい)

保育者は、一語に隠された言い表せない言葉を代弁する「そう。バナナが食べたいのね」

B 養護と生活

A 保育所における養護の大切さ

- ①授乳 抱かれることで体と心が育つ 吸う活動は筋肉を発達させ、言語活動を促す 別紙参照
- ②離乳食 咀嚼能力を身につけ、食事の楽しみを味わえるように
- ③睡眠と生活リズム 乳児にとりわけ睡眠が必要なわけ 別紙参照
環境と睡眠いのちのいとおしさを伝える 子守唄を
- ④排泄、おむつ交換 乳児に「これからおむつを替えようね」と声をかけてから交換台につれていく
きれいになった後はなるべく ふれあい遊びやマッサージを

イ 健康、安全に対する配慮

- ①健康観察の実施 登園時 保育中 降園時
- ②この事故の事故防止、安全管理について
6か月頃まで 窒息 異物の誤飲 睡眠中の事故(乳幼児突然症候群 SIDS) 転落事故

C 運動と脳・心の関係 保育のいとはみ 3 p10~12

2) 1歳児の保育 自分なりの心の世界の誕生

A 自我のめばえと自己主張の始まり⇒“いやっ”“だめ”初めて人とぶつかり合うコミュニケーションを学ぶ

- ・自我とは? なぜこの時期自我に芽生えるか?
「自分の心にききながら、自分で考え、決める力。そして他者の自我とぶつかりながら折り合いをつけていく力」
「自分を意識し、自己主張し、自分にこだわる心理的作用」
- ・自我の芽生えにどう対応するか
子どものつもりを受け止めながら大人がどうしてほしいかを子どもに訴える。
向き合って共に方向性を見出していくこと。対話の始まり
- ・自己主張できるのは、受け止めてもらえると子どもが感じた時
『この人は自己主張を受け止めてくれる人か』『この場は自己主張が許されるだろうか…』
- ・自己主張する子は自分を主張するだけでは終わらない。人にぶつかることで相手を発見し(相手の意図に気づき)相手を自分に取り込んでいく。
- ・自己主張できない子どもこそ、自我の育ちが危ぶまれる。自己主張の弱い子にどう対応する?
- ・物の奪い合いやトラブル どういう援助をしていますか?

欲張り、独占⇒自己拡大の過程

「子どもが自分の手元に物を抱え込むこと、これは自分の領域を目に見える物で満たすことによって力強さを感じ、安心する」(津守真)

どう対応するか? 独占したい思いを受け止め言葉にする 例 かっちゃんミニカー
ぶつかり合いの中で子どもは「わたし」ばかりではない「あなた」を知り、「取るばかりではない」「返すことを」「取られるばかりではない」「返してもらえること」を経験していく。
「ぼくのもつりをわかって!」自己主張の始まり⇒人とぶつかり合い、折り合う経験を学ぶ
所有権を大切に 安易に「貸して」「いいよ」のやり取りを求めない
「ごめんなさい」を強いるのではなく、保育者が「ごめんね、急に物を取られちゃってびっくりしたね」と「ごめんなさい」の仕方を示す。強引に誤らせることは、うっかりやってしまったことに對しても「自分はいけない子」という思い込みを持たせてしまう。
噛みつきやひっかきを防ぐには… 噛みつきはなぜ起きるか? を考える。

B 養護と生活

- A ①食事 食欲は人間の本能の中で一番強い本能、食欲が起きなければ人は生きられない
おなかがすいた・おいしかった 飢えと充足の体験を経て食べる喜びを得るようになる

<食べる楽しみを育てること> 自分で食べたい おいしいなという快の体験が成長ホルモンの分泌を促す

咀嚼を上手に進めるために

この時期の食事の援助については 別紙参照

②排泄の自立へのステップ

a 体の準備できたかな (排尿感覚が2時間ぐらいになったら)

b おまるやトイレに誘ってみよう 排尿感 “シー出たね”

c おむつからパンツへ

③着脱 着ることより脱ぐことから始まることが多い

イ事故防止、安全管理

- ・頭が大きく重いため重心が上にいきがちで不安定、そのため転びやすい。体のバランスを失う転倒、落下
- ・ぶつける、はさむ いろいろな所を触りたがり、切り傷、棘、ささくれなど多くなる。
- ・誤飲 消毒剤や洗剤などの置き場所に注意

C 運動と脳の育ち

- ・歩くことにより歩行が安定し移動や平衡を保持する能力が発達する
- ・歩行により子どもの活動範囲が拡大し、外界に対する興味や関心から探索活動が活発になる
- ・大人にしてもらう受動運動が意味を持つ⇒自発的な運動の基礎になる
- ・手指の発達=心の育ちのパロメーター
握む手、遊ぶ手、探る手⇒伝える手⇒描く手、作る手 (表現する手)

D ことばの育ち 1歳~2歳へ ことば習得の過程

- ・理解できることばの数は急激に増えるが、話しことばは少しずつ増える。
- ・人やモノの名前を聞くと周りを見回し探す 「テレビどこ？」⇒「あーあー」と言いながら指さす尻上がりの調子なら、質問になるということがわかってくる
- ・指さし (1歳の始め頃) 指さしてから大人のほうを見る
(1歳3か月頃) 指さす前に大人のほうを見る (大人の注意を引き付けられるかどうか確かめる)
- ・犬は、ぬいぐるみも絵本の犬も散歩で見る犬もすべて指さして「わんわん」ことばがシンボルとして使われ始める
- ・自我が芽生え、自分が誰であるかわかってきて呼ばれると嬉しそうに笑ったり、手をあげたりする
- ・二語文をはなすようになる子もいる 「プープ あった」
- ・自分の名前を言えるようになる子もいる 「よっちゃん、ねんね」
- ・今ここでおきていることだけでなく、過去にあったことも伝えようとする 「でんちゃ、のったの」「ばーば、ボールやった」
- ・聴く力…聞きたい音に集中できるが周りうるさいと聞けなくなる
- ・「ミニカーをおもちゃ箱にしまってたね」という二つの内容の話をしてても理解できる

<1歳代のことばの援助・配慮したいこと>

- ・その子が興味や注意を向けているものに気づき語りかける。やがて大人が話す事柄やモノにも注意を向けることができるようになる。 保育者の側から発信をしすぎないこと「ほら見てごらん、ひこーきがとんでるよ」「アッ ○○見つけた みてごらん」
- ・その子の行動・しぐさや身振りに言葉を添える (子どもの気持ちや行為の実況放送をたくさんしてやる)

例 玄関で靴を履き、走って庭に出ていこうとする子に

×「まだ行っちゃだめよ！」 ○「早くお庭に行きたかったのね。もうちょっと待っててくれる？ ○○ちゃんがまだ靴はいているから」

子どもが猫をじっと見ている⇒「なんてかわいい猫さんでしょう。こっち見てる。○○ちゃんのことすきなのかな」

「わあ 積み木が高い高いだね。上手に積めたね」

子どもが怒っている表情やしぐさを見て「先生が先に行っちゃったから怒ってるのね」
転んで泣き出した子に ×「痛くない痛くない、そんなことで泣かないの、弱虫ね」
○「ころんでいたかったのね」

- ・ ゆっくりはっきり、言葉を繰り返す スプーンを落としてしまった子どもに対して
「スプーンが落ちちゃったね、先生がスプーン拾ってあげましょうね。はいスプーンどうぞ」
- ・ 一語で言ったら二語で答える 二語で言ったら三語で答える
子「パパ かいちゃ」 保「そう、パパが会社に行ったのね」
- ・ わかっていることを答えさせるための質問はあまりしないこと、発音やことばの誤りを指摘せず
正しい言い方を聞かせる 「にゅうにゅうのむ」⇒「牛乳を飲むのね、わかったわ」

3) 2歳児の保育 自立と甘えの狭間を激しく揺れ動く～やがて葛藤を潜り抜け、自律の芽生えが育つ

A) なぜ2歳児の心は動揺するのか？

自立（立ち上がろうとする・能力の発達）からこそ揺れ動く。自分の要求やつもりを意識しているが、まだそれをことばで伝えられない。＝自分の要求や思いが人にわかってもらえない苛立ち
例 さなちゃんのみ

葛藤なくして成長はあり得ない。その葛藤を肯定的にとらえ安心して感情を吐露することを促す
「今、一生懸命自分と闘っているんだよね、つらいね、泣きたいときは泣いていいんだよ」

例 りょうちゃんの「焼き鳥 買って買って」

⇒すぐには自己コントロールできないで、パニックになってしまったり、泣いたり、怒ったり
わめいたりする自分と向き合う時期が必要

しかし自分の本当の気持ちを分かってもらえれば、たとえ要求が叶わなくても我慢できるようになる（やっばし…やる）⇒自律の芽生え

例 DVD しやうちゃんのいやじゃいやじゃ

この時期大人による共感が欠如すると… 人への信頼感が育たない、自我の育ちが弱くなる

「共感されて育つ真の自己」

- ： 自我の調整力は自分の心を受け止められ、聞きとられる中で育つ
- ： 自己主張とわがまま 例 DVD “わかちゃんのところへすわりたい”
- ： 自律（内面の発達・自分で判断する力・自分で決めたことは我慢できる）を支える保育者の対応
- ： 行動は子どもの自己表現→その行為の意味を考え、子どもに伝える
いろいろ体験させ、答えを自分で見つけさせる。指示、命令、押しやだまし、おもねることをやめて、大人が一人の2歳児としっかり向き合い、大人の気持ちを訴える。

ねがいと悩み 双方の矛盾を理解し乗り越えられるよう支えるのが保育者、親の役割

例 DVD しんちゃんの乱暴 <見ると観る>

事例 ゆうや君のスヌーピーうんち

「この困難な時期を、大人の適切な援助によってどのようにスムーズに切り抜けられるか がその子の一生の適応を決める」エリクソン

： 自尊心の育ち・“この世でたった一人のかけがえのないじぶんをたいせつにして！”

『自分の気持ちが理解されず悔しい』という感情が生まれてくるのならそこには、自尊心が芽生えていると考えられる。無視されたり、出鼻をくじかれたりするとたまたま不快になる。自分の心を大切にされた子は、人の心をも大切にできる力を養うことができるようになるのではないのでしょうか。 事例 きよちゃんとトマト

- ・ この時期の子どもにとっては、自分の要求が実現できたかどうかよりも、自分の思いが理解されたかどうかのほうが重要になってくる。なぜこれほどまでに自分のつ・も・り にこだわるのか？ 2歳児にとって自分のつもりが認められることこそ、自分が認められることになるから。『大きくなった自分を認めて』『こんなこともできるようになったよ』自分が感じた価値を他人にも評価し認めてほしい。⇒自尊心の育ちといえるのではないのでしょうか。
- ・ 「自分が自分の主人公になっていくんだ」という道筋をしっかり支えていきましょう。

ア 食事 食具を正しく持つ～3歳ごろになったら箸へ

排泄 排便の自立 排便のリズムを作るには…
便秘がちな子どもには…

着脱 “ジプンで”と主張するようになることを大切に、時間がかかっても待って、やれた時は褒め自信につなげる。時にはできるのに“やって”と甘えて求めてくることもある。そのようなときは突き放したりせず、快く受け止める。
ボタンやチャックなど細かい操作もできるようになる。(遊びの中で箸を使ったりひもで結ぶ活動などを取り入れる)

歯磨き、うがいの習慣が保育者の援助で身についていく

イ 事故防止と安全管理

2歳児期のけがは1歳児とあまり変わらないが、走り出すことが多いためとびだしに気を付ける。公園などに散歩に行った際、捨ったジュースの飲み残し、菓子袋の残りやたばこなど口にすることがある。

㉔ 2歳児の運動発達

- ① 歩行や手の自由な動きを獲得し、動作のまだぎこちない1歳児と、基本的な運動を身につけ、巧みに活動する3歳児とのまさに中間の段階といえる。
- ② 歩く、走る、跳びはねる、片足立ちをする(これは片足ケンケンやスキップなどの基礎)など全身の移動運動やバランスを保つ粗大運動の発達が著しい。戸外で大いに歩く、走る、追いかっこなどの機会を持つようにしたい。
- ③ 大人にしてもらう受動運動(ヒコーキポンポン、でんぐり返し かたぐるま ロボット コアラなど)は、自ら挑戦して遊びだす固定遊具などの能動的運動遊びの土台になる。
- ④ 滑り台、ブランコ、三輪車、鉄棒などの運動遊具に興味を持って遊ぶようになるが、これらの遊具で遊ぶことを通して2歳児の運動能力は著しく発達する。
- ⑤ 積み木やカプラ、モノブロックなどでいろいろな構成遊びをする、生活の中でボタンをはめたり、靴を履いたり、食具を持って食べる、クレヨンや筆で描く(特に曲線を描けるようになる)などモノの操作が巧みになり微細運動の発達も著しい。

㉕ 2歳から3歳 ことば数が急増する=周りの物事、事物に対する好奇心や探索心なしにはことばの発達もあり得ない。⇒想像力の発達につながる

① 二語文から多語文～従属文へ「ジュースのみたい、早くちょうだい」

動詞ノ獲得が著しい。“見てみて、跳んだの”⇒保育者「そう、この台から跳び下りたのね」いつも行動しながら考えている。行動(遊び)ながら考えをまとめたり考えたことを表現する力を獲得していく)例

2歳後半になると…他の品詞(形容詞、接続詞など)も獲得していく

② おとなと1対1なら数往復ぐらいの言葉のキャッチボールができる

みつる 「せんせい お花 咲いてた」とフリージャーを手に握って見せる。

保育者「そう お花が咲いてたの?(そのまま繰り返して子どもに返す。そうすることで子どもは自分の感動、伝えたいことが相手に伝わった喜びを感じ言語化する喜びを高めていく)3歳ごろになったら「そう、どこに咲いてたの?」「お庭…」

黄色いかわいなお花ね。どこでみつけたの？」

みつる「おうちの庭に咲いてたの」

保育者「みつるちゃんが見つけたの？」

みつる「そうだよ。みっちゃんが見つけたんだよ」

保育者「いいにおいがする…」みつる「ほんと、いいにおいがする！」

③ 長い文や話を集中して聞き、理解できる。自分が主人公の、体験した話を聞くのが好き

「大きいグループのイチゴさんが帰ってきたら、今日はペランダでお食事しましょうね。

〇〇ちゃん、イチゴさんが帰ってきたら、先生に教えてね」「わかった」

④ 自分のつもりやイメージしていることを伝えようとする。特に空想と現実が入り混じった話をする。

例1 「いま、バシユのうんてんしゅ なったの」

「あした パパと公園いって ポールやるの」

例2 りょう「ぞうさんおんぶするの」(象のぬいぐるみを抱えてきて…)

保育者「そう今日も象さんおんぶするのね」

りょう「ぞうさん、おかあちゃん、いなくなっちゃったから おんぶしてやるの」

保育者「ぞうのおかあさんどこにいっちゃたのかしらね」

りょう「ぞうさん いま うえ〜ん うえ〜んって泣いてるの」

⑤代名詞を盛んに使うようになる

これなに? どこにあるの? ここにいてね あっちいきたい バスどっち行った?

⑥対象概念としてのことばを覚える 色への関心

大きい/小さい ひとつ/たくさん 長い/短い つめたい/あつい

⑦見立てつもりが活発になる⇒ことばが思考の機能を果たすようになる

へびみたい ことばによるイメージを拡大させながら他者とそれを共有しあう

⑧明日の意味が理解できる 「あとでね」「あしたね」「あしたまたやるからね」

時の流れの理解も可能になるがまだ誤りも多い

「明日行ったんだあ」「しゃっき やったの」「ずっとまえ、きたね」

⑨第2質問期 結果から原因を知ろうとする⇒ことばで考える力が育ち始める

・考えるとは覚えたことばを機械的に発することではなく、頭の中に思い浮かべ、思いと思いを結び付けたり、思いを発展させたりすること。思いを巡らせ自分のことばで少しずつその思いを表現していく。

「なんでせんせいおこってんの?」

「どうして触っちゃダメなの? ふ〜ん これは、熱いから触っちゃいけないの」

大人の表情や雰囲気よりもことばによって確かな判断をし、理解するようになる。

⑩自律のための抵抗期 保育者「早く手を洗ってらっしゃい」 子「もうあった」「いいの」

⑪人との思い、考え、イメージの違いに気づく

「たくちゃん プランコ 乗らないんだって。きよちゃん(自分のこと)のりたいのに」

<この時期の大人の配慮点>

・まだまだ十分な表現で語れない2歳児のことばを聞き、その子が伝えようとしているイメージやつもりを明確にし、足りないところを補足して、考えていることやイメージを確認していく。このことによって言語能力はもとより、知的能力も拡大していく。

例1 子「おみずいっぱいになった」

保「バケツのお水がいっぱいになってあふれてしまったのね」

例2 子「ボール あっちいっちゃった」

保「ボールがプランコの方に転がっていっちゃったことを先生に教えてくれたのね」

・ことばが十分出ていなくても、聴こうとし、わかってくれる人がいるという実感を得させる。

そのことが、伝えようとすれば(話せば)わかってもらえるという実感を育む。

E社会性の発達 <友だちを感じ友だちや仲間と響き合う子どもたち>

1 友だちへの関心が芽生える条件

①特定の大人と子どもの1対1の人間関係の確立が土台である(園でもまず保育者との関わりが安定しているかどうか…)安心感が確立しない子は、いつまでも大人との関係を引きずっていく。

迷子になっても泣いたりしない、親を探さなくなっている

②自我の育ち⇒自己主張しながら子どもたちは、他児とぶつかり、自分の思いだけでなく他児の気持ちにも気づき、かかわりを持つことができるようになる。

③特定のモノ、特定の人、特定の子に固執する(〇〇ちゃんの隣に座りたい)

モノや人への執着は、裏返せば自分のしたいこと、自分の大事にしていたものへの強い愛着心、即ち自我の拡大と考えられないか。逆に「自分の!」と言う所有感を持たない子はどのような子か? 自他の区別がつく時だから、自分のモノにしたくなる。集団生活の中では「自分のモノ」独占できるモノがない。いつも「みんなのもの」「保育園のモノ」「順番」…それでいいのか?

「自分のモノ」という教育をしていない。共有意識を持つ以前に1, 2歳児には自分のモノという意識を大切にし、モノとのかかわりを強め、モノを大切にすることを体験させたい。それが「共

有意識」につながる素地である。

例 強いこだわり・たいちやんとブランコ

2 2歳児の友だち関係の育ち

ア) 遊びを通して共感的知性を広げる2歳児たち

①共通体験を重ね相手のつもりがわかるようになる 例 滑り台でつながって遊ぶ

②場の奪い合いや共有、様々なトラブルを経験し少しずつ友だちのつもりや気持ちがわかりあう。

例 同じ窓で見たかったの おんなじ⇒知性の育ちとつながる喜び

イ) 気の合う子(友だち)ができてくる

その子と一緒にいたい気持ちが芽生える。⇒二人の関係を大切に

例 二人だけだもんね!

ウ) 群れから集団に変化していくプロセス

保育者や友だちと一緒に生活し、活動することで『友達と一緒に楽しい』と感じるようになる

3 社会性を育む保育者の役割、援助

①集団生活という名のもとに個々の子どもの要求を押さえつけてしまうことがないように。

(約束だから 皆何してる?)

②一人一人のみんなを受け入れる。どの子も受け入れる。一人でも受け入れない子がいると子どもたちもその子を排斥する。

③個～多へのプロセスをゆっくりじっくり楽しませること。個々の心情がしっかり育っていくことに集団の意味がある。

④子どもの『自立したい』という要求が広がっているか。

子どもの自発的な活動がどれほど仲間を必要とするか。子どもたちの活動の必然性から友だち関係が育っていくような援助を!

⑤子どもの葛藤の際の大人の援助の在り方が最も重要。子どもたちの思いやり行為のモデルになる。

葛藤を潜り抜けた子は、再び同じようなことで不安定に陥ることはない。

* 共感しあう力がつく心地よい友だち関係を育もう

終わりに

子どもたちの「できること」ばかりに目を向けるのではなく、「やりたいこと」「本当のねがいは何か？」にしっかり目を向け、一人一人の子どもたちが、みんな「自分が自分の主人公なんだ」と感じ取って、その歩みを確実に支える保育をしていきましょう。